



Title	日葡関係開始時における倭寇介在説の検討
Author(s)	有水, 博
Citation	大阪外国語大学論集. 1994, 11, p. 145-153
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79647
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日葡関係開始時における倭寇介在説の検討

有 水 博

Os primórdios das relações históricas luso-japonesas.
Discussão sobre uma hipótese de
intermediação dos piratas sino-japoneses

Hiroshi ARIMIZU

(Resumo)

Uma comunicação feita no colóquio internacional "O SÉCULO CRISTÃO DO JAPÃO" realizado em Lisboa de 2 a 5 de Novembro de 1993, cuja publicação, na sua íntegra em português, se espera para o mes de Junho deste ano.

Tratando-se de uma possível intermediação dos piratas "WAKOU", no início das relações nipo-portuguesas, o escritor questiona a validade deste argumento a partir de três ângulos de indagação: Será que os piratas desempenhariam o papel principal na abertura dos contactos luso-niponicos?; Ou, ao contrário, impediriam os mesmos?; e finalmente como é que o início do comércio entre os dois países teriam afectado as atividades dos piratas sino-japoneses?

Com relação a todas estas perguntas, as respostas seriam negativas, indicando importância relativa da iniciativa dos piratas "WAKOU" no relacionamento luso-japonês.

〈はじめに〉

昨1993年は、種子島450周年を記念して、各地で一連の行事・学会等が開催されたが、前回の論集第9号で報告した米国U.C.L.A.における4月の国際学会¹⁾のあと、5月にはマカオで「ポルトガルとの遭遇—文化を運んだ言語」が、また、11月にはリスボンで「日本におけるキリスト教の1世紀」と題する学会が開催された。筆者はU.C.L.A.での報告（鉄砲伝来異説について）に

次いで、マカオでは「日本における最初のポルトガル語の学校、16世紀と20世紀」、更にリスボンにおいては本稿表題の「日・ポ関係開始時における倭寇介在説の検討」と題する報告を行った。マカオにおける学会はポルトガルの東洋研究所（IPO）主催の下、アジア各地でポルトガル語の普及にたずさわっている教員・研究者・宣教師、計42名が、5月27～29日の3日間にわたり報告を行ったのに対し、リスボンにおける学会は、ソアーレス大統領を名誉総裁とする大航海時代記念委員会の下で、カトリック大学及びリスボン新大学が事務局をつとめた大規模なもので、ポルトガル、ローマ教皇庁、日本、マカオ、のほか、ドイツ、U.S.A.、ブラジル、フランス各国から、合計48名の研究者が16・7世紀のポルトガルとアジアの関係史をテーマとして、11月2～5日の4日間、リスボンの大航海時代の記念碑的建物ジェロニモス修道院内において報告及び熱心な討議を行った。以下は筆者のポルトガル語による報告を和訳し、註をつけたものである。

〈導入部〉

本年4月、ロスアンジェルスでU.C.L.A.で開催された国際学会において、筆者は「日本への鉄砲伝来異説」について報告する機会を得た。この説は、日本に鉄砲を初めてもたらしたのはポルトガル人ではなく倭寇（中国及び日本の海賊）であるという、ある日本人研究者の新しい主張である。同学会において、筆者はこの説を様々な角度から検討し、主として現代史的な技術移転の観点からこれを批判すると共に日本文化史上に占めるポルトガル人による鉄砲導入の重要性を強調した。

I. 今回は、上記の説を更に敷衍して行くと、日本とポルトガルの歴史的関係の始まりに倭寇が主要な役割をはたしたことになるので、この点を批判的に検討してみたい。

『鉄砲記』²⁾（即ち鉄砲伝来記）は、鉄砲伝来について今日まで日本側の殆ど唯一の資料となっている。この『鉄砲記』によれば、ポルトガル人が最初に日本に来たのは、嵐のため難破した「大船」に乗って漂着したものだという。この漂着した所が種子島で、その島の一人のお役人が船の代表者とお互いに砂浜に漢字を書いて意思の疎通ができたとのことであり、その際、船の代表者は自分の名を「五峰」で明の儒生であるとしたことになっている。また、その際船に乗っていた、今迄日本人が見たこともない風貌の3人の異国人が各人の名前と共に記録されている。

今日、日本の歴史家の多くは³⁾は、中国の文献『日本一鑑』⁴⁾に基づいて、この砂浜に書かれた名前「五峰」を倭寇の主要な頭目の一人「王直」が用いていた一種のペンネームであると認めている。

そこから、日本とポルトガルの歴史的関係の始まりを開いたのは、その仲介者となった倭寇であるという仮説が導きだされる訳である

確かに「五峰」というペンネームを使っていたのは「王直」であるという点については、他の

幾つかの文献からも、殆ど疑いの余地はないように思われる。

しかしながら、筆者がここで問題としたいのは、種子島に最初にポルトガル人を連れてきた「大船」の代表者が、本当に「五峰」であったか否かという点である。この問題提起は、次の疑問点が出発点となっている。

- 1) 王直が「五峰」というペンネームを用い出したのは密輸の基地を日本の五島列島に移した後であるといわれている（「五峰」というのは五つの峰という意味で、5つの峰が海に沈んでいるような五島列島と相似性がある）。とすればこれは、1548年以降⁵⁾のことであり、種子島の漂着より5年も後のこととなり、種子島に漂着した大船の代表者が五峰を名乗るのは不自然である。

中国の様々な文献⁶⁾によれば、王直が初めて日本を訪れたのは、1545年のことであり、種子島の出来事より2年後のこととなる。

- 2) 日本の隣国の根拠の確かな『朝鮮王朝実録』によれば、1540年頃密輸のため日本に向かう中国の数隻の船が、嵐のため朝鮮の南部の島に漂着したという記録がある。⁷⁾

また日本側にも、1541年及び1542年に豊後＝現在の大分県の神宮寺浦に中国のジャンクが複数到着したという記録もある。

従って、1543年に種子島に漂着する可能性のある中国人は「五峰」の他にも多数いたといえるであろう。

- 3) 『鉄砲記』は、種子島の出来事のあと、50年たった後で書かれたものであり、また、種子島の領主の偉業をたたえる性格の文書であると一般にいられている。そこから、鉄砲を日本に初めてもたらした者の仲介者として、種子島の出来事の時には未だ存在してさえいなかった倭寇の最大の頭目の一人の名前を、後から、想像力を加えて、採り込み、鉄砲伝来のイベントを劇画化した可能性が高い。

- 4) 以上の解釈は、ポルトガル側の資料に照らしても、補強されると思う。即ちポルトガル側の資料によれば、「1542年、アントニオ・ダ・モッタ、フランシスコ・ゼイモト、アントニオ・ベイショットの3人が自己所有のジャンク船でシャムと取引した後、中国に向かうことを決め、広東の chincheu 港の近くの島蔭でその積み荷を商うことができた。

というのは、当時中国皇帝の勅令により『目の大きいヒゲづらの外国人（＝ポルトガル人）は帝国内に立ち入ることはできない』からである。その帰途、彼等は嵐に遭って日本に漂着、そこで歓待された」とあるからである。⁸⁾

従って、日本とポルトガルの歴史的関係の始まりを開いたのは倭寇であるという仮説を、

そのまま受け入れる訳にはいかない。

Ⅱ. それでは逆に、倭寇が日本とポルトガルの関係が開始されるのを妨げたであろうかという別の観点から倭寇の役割を検討したい。というのは、ポルトガル人が中国南岸に1513年ころから現れ初めてから、日本に到達するまで30年もの歳月が経過したからである。

一般には、ポルトガルと中国の間に長年にわたって一連の行き違いとそれに伴う紛争があったことが、日本との関係の開始が遅れた主要原因だとされている。

1) 中華思想の観点からすれば、商品交換の基本的パターンは、周辺の後進国から、中国皇帝に貢ぎ物を捧げ、皇帝がこの貢ぎ物に返礼するという方式であった。従って、貢ぎ物を積んだ外国船は、中国の官憲たちが指定した港に入り、そこから皇帝の居住する中心地に向かって隊列をくみ、中国側の宿駅制度による運輸システムに乗って、貢ぎ物を運んだ訳である。

2) 他方、ポルトガルの通商システムは、よその国の領土内に砦付きの通商拠点を建設し、ここを基点に通商するというものであったが、この拠点は海賊やその他の危険から商品を守る倉庫の役と、また、船への物資補給の安定した基地の役割をはたすものであった。そして、通商の主な目標は、以前からその地に存在していた通商システムに割り込むことであったため、その地の他国の主権を侵害する一種の侵略行為となることがあった。

シマオン・デ・アンドラーデは、珠江の河口の近くに、ひとつの砦を築き、その砦の中では絶対君主のようにふるまい、部下の船員を絞首刑に処して中国人側に衝撃を与え、誇り高い広東の中国官憲の面目をつぶしたことから、後世の大方の歴史家の激しい批判をあげてきた。

また、当時の一般的風習に従ったものではあるが、海賊行為をするポルトガル船もあった。例えば、カスタンニエダのインディアの歴史第6巻172頁には、次のような記述がある。「(マルティン・アフォンソ・デ・メーロは)、支那で蜂起があったとのニュースを聞き、直ちに支那に向かったが、そのお供としてドウアルテ・コエリョが一隻のジャンクで同道したが、我々の手の者達はその途中、沢山の豊かな獲物を獲得した。」公平を期して言えば、ポルトガルはヨーロッパ諸国の中では一番早く15世紀の半ばに平和的な通商政策を推し進めるようになったが(ドン・ペドロが1448年ボール・マリ及びジャロッフオス諸国に対し)⁹⁾、一方ポルトガル船は15世紀以降特に16世紀中は他の西欧諸国の海賊(フランス人・イギリス人等)の餌食となった。

3) このため、マルティン・アフォンソ・デ・メーロが指揮する艦隊が、1522年8月¹⁰⁾、一つの砦を築こうと広東の沖合に到着した時、中国人はこれを侵略行為とみなして武力対決し、こ

こに中国とポルトガルの間に一種の戦争状態が発生した訳である。

リスボン新大学のジョアオン・パウロ・オリヴェイラ・イ・コスタ先生の説によれば、これより後ポルトガルの対アジア政策、特に中国政策はより現実的な成熟したものに変わって行ったとのことであるが、これはポルトガルの国王がドンマヌエルからドンジョアオンⅢ世に代わった(1521年)以降のことである。

他方、ポルトガルは当時アジアに於いては二つの敵対勢力と対峙していた。ひとつは、紅海を制覇した後、インド洋で影響力を拡大していたオスマン・トルコであり、もう一つはポルトガル人にとって香辛料貿易の宝の箱であったモルッカ諸島を占領しようとしていたスペインであった。したがってポルトガルの当局者にとっては、中国との関係を発展させるために多くの精力をそそぐ余裕はなかった。

以上述べた要因のほかに中国側の頑迷な態度もある。例えば、1530年¹¹⁾ 広東の一つの港が対外通商のために開港された時、ポルトガル人だけが締め出された。これに自国が文明の中心であるという意識の中華思想を勘案すれば、ポルトガル人が中国の南部に出現し始めてから、日本に到着する迄に30年(当時の船で8日間の航程)の歳月が経過した原因の大半が、多分、説明できるであろう。

- 4) 実際、ポルトガル王室は中国との通商・外交関係を発展させるための公式艦隊の派遣を取りやめ、また王室から特許状を得た船団の行き来きも中断された。しかし、このためポルトガルの商人と中国沿岸の住民の間の密貿易が盛んになる。というのも、通商を続ける魅力は捨て難かったからである。ポルトガルの冒険的商人は、中国官憲の監視の少ない所をねらって、中国沿岸を北上し始めた。¹²⁾ 中国側の密輸活動の中心は、浙江省の錨泊地雙嶼港と寧波(後に Liampó と呼ばれる所)の近くの舟山列島のひとつの小島であった。雙嶼港は揚子江の河口近くに位置する双子島であり、この島が中国人達の密輸の基地になったのは1526年前後であった。この島を支配した許兄弟は1540年以降ポルトガルの冒険的な商人と常時接触するようになる。¹³⁾ この許兄弟の直接の部下だった王直が種子島に初めて来た者とみなされている訳である(が、本稿ではこの点について先に否定した)。従って王直の前任者が、日本に最も近い中国沿岸の密輸基地をポルトガル人達に提供したという事実は、多分同人が日本とポルトガルの歴史的関係の初期に於いて、一定の役割をはたしたのではないかと推定する根拠となろう。実際王直自身は、記録によれば、1545年(種子島の2年後)に日本を訪問した後、Liampó に数人の日本人密輸業者を同道して帰っており¹⁴⁾、この事実から、倭寇はポルトガル・日本間の通商の開始を妨げたのであろうかという本章の最初に提起した仮説には根拠が乏しいということになろう。

Ⅲ. 以上見てきたとおり、倭寇はポルトガルと日本の歴史的関係の始まりをつくりだしたとまで

はいえず、他方、この歴史的関係が始まるのを邪魔する条件を持っていたとはいえないであろう。

倭寇は、日本に最も近い位置にある中国の密輸基地の港をポルトガル人に提供したことにより、種が芽を出すよう土壌を整えたという意味で間接的に日本・ポルトガル関係の始まりに寄与したといえるだけであろう。

ここで第三番目に提起する問題は、ポルトガル人が日本に到来して、日本との通商が始まったことが、倭寇の活動になんらかの影響を及ぼしたであろうかという疑問である。(倭寇と日・ポ関係史の関連を論ずる場合、以上述べた3つの点を押さえておく必要がある。)

ここまで倭寇という語を用いてきたが、この中国起源の言葉は、日本・朝鮮においても使われ、歴史的に広い範囲の現象を指すが、もとの意味は日本人(蔑称)の海賊という意味を持つ。

倭寇という語の起源は1350年頃から朝鮮の南岸を日本人が襲撃した頃から使われ始めるが、当時日本は刀剣や弓・矢、鏡、螺鈿の家具等を輸出し、朝鮮からは薬草や穀物を輸入していた。この日本側に有利な貿易収支の不均衡が益々拡大するにつれて、朝鮮の支配者は、日本との通商を禁止するに至った。¹⁵⁾ そこからこの通商に頼っていた西日本の沿岸の住民が、小規模な集団を形成し、隣国の穀物倉庫を襲うようになったのである。時が経過するに従い、この日本人の海賊を核として、現地の不満分子、反逆者が加わり、大きな集団と化して行った。日・朝両国の政治・行政の不安定さの下で、これらの盗賊集団は大規模化し、3千の人員、千頭の馬まで有する大軍団となり、約40年間にわたって朝鮮各地を荒らしまわった。この現象を14世紀の前期倭寇と一般に呼ぶ。¹⁶⁾

今、ここで問題にしているのは16世紀の倭寇で、本報告に於いては、倭寇という語をそのまま使ったり、あるいは修辞上同じ言葉を繰り返し使わないよう日・中の海賊といいかけているが、実態は日本人の少数参加を伴った¹⁷⁾ 主として中国人の密輸業者の集団を指す。この16世紀の倭寇が発生した原因は、中国人が外国人と接触したり、事前の許可なしに外洋を航行することさえ禁じた中国側の勅令による。

さて、ポルトガル人が日本に到来した頃の中国沿岸における倭寇(海賊行為)の発生件数を、別表により見てみよう。

別表を見れば判るとおり、日本とポルトガルの通商関係が開始されたことが、倭寇の活動に影響を及ぼしたとはいえないであろう。というのも、種子島の出来事に続く8年間の間(1544～1551年)海賊行為の発生件数に変化が見られないからである。¹⁸⁾

倭寇の大活動期(1553～1559年)いわゆる嘉靖大倭寇の現象は、中国側の官憲が倭寇の主要な2つの基地を、1548年と1553年に明の陸・海正規軍を投入して、攻撃し破壊・弾圧したことに対する倭寇側の激しい反抗とみなされている。¹⁹⁾

興味深いことには、この最中に即ち1554年に中国政府はついにポルトガルとの通商関係再開を受け入れたことである。

この中国官憲のやり方は、彼等が考える真に反政府的な分子を、便宜的に倭寇と提携している者達（ポルトガル人等）及び民衆一般から切り離して孤立化させることを狙ったものと解釈できるのではあるまいか。

これをポルトガル人側から見れば、日本との通商を開始したことが、中国政府を刺激し、その孤立政策を変更されるひとつの契機となったといえまいか。

〈結 び〉

今年の夏休み一杯、筆者はポルトガルのアジア基金（Fundação Oriente）のフェローシップをいただいて、本テーマに関する資料集めのためリスボンの主要な公文書館に通う機会を得た。

しかしながら、16世紀の30年代、40年代の中国沿岸における冒険的なポルトガル商人の活動を明らかにするような文書、あるいはこれらの商人の倭寇とのつながりを示す資料は、ついに見出せなかった。²⁰⁾

それにもかかわらず、本報告をここで行う目的は、御列席の皆さんから、このテーマについての調査を更に進めて行くための示唆あるいはアドバイスを頂きたいからである。

1975年にサンフランシスコで行われた第14回国際歴史学会でかつて強調されたとおり、非公式あるいは闇の国際関係、例えば海賊の活動等に関しては、その出身地においては非合法活動であるため、概して記録が残されてないので、特に国際的な情報の交換・共同研究が重要となっている。

最後に一言付け加えれば、世界史の中で海賊行為がくり返されてきたのは、この倭寇の例を見ても、やはり、急速な経済の成長と、その新しい状況に適切に対応できない柔軟性の足りない政治・行政システムとの乖離にあるのではないかということである。

中国沿岸における海賊行為の発生件数

(年)	(発生回数)	(年)	(発生回数)
1540	2	1551	2
41	0	52	13
42	1	53	64
43	0 (種子島)	54	91
44	0	55	101
45	1	56	68
46	0	57	25
47	0	58	32
48	2	59	56
49	1	60	15
50	1		

田中健夫『倭寇』、1982、東京、204－5 P.

〔註〕

1. XVI Symposium on Portuguese Traditions (Europe, America, Africa, Asia) April 24-25, 1993. University of California, Los Angeles. U.C.L.A. Encruzilhadas/Crossroads" (printing)
2. 南浦文之『鉄炮記』、1606。
3. 例. 田中健夫『中世対外関係史』、333頁、東大出版会、1975、東京。
佐久間重男『日明関係史の研究』、240頁、吉川弘文館、1992、東京。
4. 鄭舜功『日本一鑑』、1564－、vol.6 13-14f。
(該当部分のコピーを東洋大学、中島敬氏より頂いた)
5. 田中健夫『倭寇』、134頁、1982、東京。
6. 同上、132頁。
7. 宇田川武久『鉄炮伝来』、1988。
8. Comes, Luis G. "Efémere Comércio português, no século XVI, na China do Norte". 1967. Macau. 124p.
9. Serrão, Joel. ed. Dicionário de História de Portugal". vol.5 (piratas).
Castanheda, Fernão Lopes. "História da Índia" Livro III, capítuloLXXV.
10. Correa, Gaspar. "Lendas da Índia". Tomo II Cap. IX (pub. 1858) pg.718.
11. Castanheda, Fernão Lopes. ibid. Libro IV. capítuloXIII. pg.172-3, e Livro V. capítulo LXXX. pg. 129.
12. Gomes, Luís G..ibid. pg.113.
13. 佐久間重男『日明関係史の研究』、240頁。
14. 佐久間重男、同上、265頁。(なお「王直等が嘉靖19年＝1540年広東に行き、巨艦を造り、・・・日本等・・・」はあとから作為された可能性濃厚＝佐久間274頁＝自立的中・小商人層の形成説に対する疑義、参照)
15. 外山幹夫『中世の九州』、171-2頁、1979、東京。

16. 村井章介『中世倭人伝』、1993、東京。
17. 田中健夫『倭寇』、164頁。
18. 日・ポ通商関係の開始によって、最も直接の影響を受けたのは、琉球王国の中継貿易・その衰退であろう。（高良倉吉『琉球王国』、105頁、1993、東京、参照）。
19. 田中健夫『倭寇』、137－164頁。
20. ポルトガル歴史学会会長 Prof. Dr. Joaquim Veríssimo Serrão（リスボン大学歴史学教授）の指導の下、同学会図書室において、7月下旬より2週間カスタンニエダ著『インディア発見征服史』4巻。ガスパール・コレイア著『インディアの伝承』8巻。アルトゥール・バジリオ・デ・サー著『ポルトガル東洋宣教師団史資料集』6巻、等を調べた上、8月中・下旬トーレ・ド・トンボ公文書館、アジューダ図書館、海外発展史公文書館、国立図書館特別閲覧室、海軍図書室に通った。なお、本学会の最終日筆者に司会をせよとの有難いお言葉を組織委員長より頂いたが、フライト限定航空券の関係で不可能となった。

（1994年5月9日 受理）